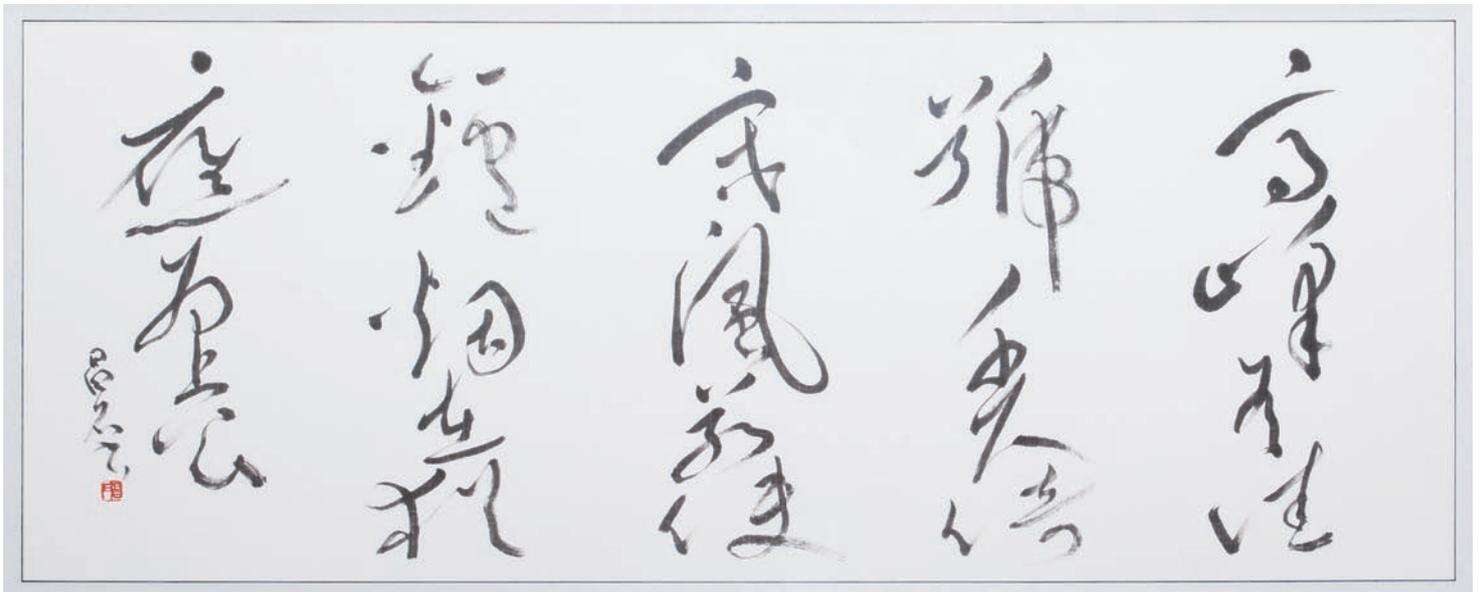


名古屋 文化情報

2013
5・6
May. June.

No. 350
NAGOYA
Cultural
Information

随想／吉川トリコ（小説家） 視点／名古屋長唄大会（青少年育成事業） この人と／山下 智恵子（作家）





いつもご愛読いただき、ありがとうございます。
「なごや文化情報」は、今号から隔月刊になりますが、
内容の充実に努めてまいりますので、
何卒よろしくお願い申し上げます。

Contents

名古屋市文芸祭 受賞作品…………… 2
 理事長就任のご挨拶…………… 3
 随想 チャリティとエンターテイメント 吉川トリコ(小説家)… 4
 ピックアップ…………… 5
 視点 名古屋市芸術創造センター〈創造活動サポート公演〉
 「第38回名古屋長唄大会」青少年育成事業について… 6
 この人と…山下智恵子(作家)…………… 8
 おしらせ…………… 12

表紙

作品
 「高峰」(2012年/70cm×178cm)
 作者不祥 中国の風景詩を和様体で表現した作品です。

伊藤昌石 (いとう しょうせき)
 1946年 愛知県名古屋市に生まれる
 2001年 中部日展中日賞受賞
 2007年 愛知県芸術文化選奨文化賞受賞
 現在 日展会友・読書法展企画委員
 興文会・松風会会長
 大知会理事長
 公益社団法人中部日本書道会理事・事務局長

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知 外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
- 酒井 晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中 由紀子 (美術批評/ライター)
- はせ ひろいち (劇作家・演出家)
- 米田 真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

今回から、名古屋市文芸祭主催事業として開催されている「名古屋市文芸祭」(名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部で、二〇二二年に短歌・俳句・川柳の上位六賞、詩の上位二賞を受賞された作品を順次掲載します。

二〇二二年 名古屋市文芸祭
 (第六三回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
 短歌の部 受賞作品より
※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆
 さといもの葉っぱの水玉ころがって
 キラキラコロコロ楽しそうだな
 名古屋市立大杉小学校三年 遠山 愛歩

◆市会議長賞◆
 夏風がいたずら吹いてゆらすのは
 硝子細工の小さな風鈴
 名古屋市扇台中学校三年 林 風花

◆市教育委員会賞◆
 ぶらんこをこいだらみえたゆうやけが
 ひろがつているせかいがあかい
 東海市立大田小学校二年 山中 遥

◆市文化振興事業団賞◆
 友達と時間を忘れて立ち話
 学校帰りのかけ長くなる
 名古屋市立汐路中学校二年 渡辺 永美

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆
 学校のメタセコイアはまっすぐに
 ま夏の空へぐんぐんのびる
 椋山女学園大学附属小学校二年 江口 未紗

◆中日賞◆
 忘れもの取りに帰った教室は
 シーンとしている空っぽの部屋
 東海市立加木屋中学校三年 高濱 絵梨

理事長就任のご挨拶



公益財団法人名古屋市文化振興事業団
理事長

平野 幸久

このたび理事長に就任しました平野でございます。名古屋市の文化振興に貢献できますよう、鋭意努力して参りますので、宜しくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

就任にあたりまして、私と文化とのかかわりを織り交ぜながらご挨拶をさせていただきます。

私は以前勤めていた自動車会社の工場の立ち上げのため、5年間イギリスに住んだことがあります。忙しい日々ながらも、長い歴史を持つ奥の深い国での生活は楽しく、充実したものでした。特に大好きな音楽鑑賞では、バーミンガム市交響楽団の演奏を楽しみ、ロンドンのコベントガーデンのオペラハウスへよく出かけました。ザルツブルグ、パイロイトの音楽祭に足を伸ばしたこともあります。また、時間があれば美術館や博物館めぐりをしました。

この経験を通し、私は芸術文化の持つ、言葉や習慣の壁を越えた癒し、明日への活力を養う力、人と人をつなげる絆の力を実感いたしました。

帰国して2年後、私は中部国際空港セントレアの開港に携わりましたが、やはりここでも、巨大プロジェクトに携わる緊張を解きほぐす、かけがえの無いパートナーが音楽でした。

中部国際空港では、地域の方にも身近に音楽に親しんでいただけるよう、330人を収容する多目的ホールを作りました。現在は、海外の超一流の音楽家の演奏会の他、地元の音楽家のお披露目会、そして私自身も趣味のフルートの発表会を開催するなど、空港が地元の皆様、旅行される皆様に生の音楽に触れる機会をご提供するユニークな場所になっております。

このたび縁あって、大好きな文化の振興に携わる機会をいただきました。今までの私の経験を活かしつつ、アーティスト、文化関係団体、地域の方々にご支援、ご指導をいただきながら、名古屋市の皆様により質の高い文化事業をお届けできますよう、邁進して参りたいと思っております。

事業団は今年で設立30周年を迎えます。文化活動の環境変化や、指定管理者制度の導入など、取り巻く環境は厳しさを増しつつあると聞いています。自立的で持続可能な運営のため、そして「文化共創のまち名古屋」の発展のために、私のこれまでの民間企業での経験がお役に立てればと思っております。皆様の格別のご理解、ご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

随想

チャリティとエンターテインメント



よしかわ

吉川 トリコ(小説家)

R-18文学賞ゆかりの女性作家10人で東日本大震災復興支援チャリティ同人誌『文芸あねもね』を電子書籍でリリースしたのが2011年の7月。翌年3月に新潮文庫から刊行された際には、著者印税を復興支援のため全額寄付した。

震災直後、テレビに映る衝撃的な映像やどこからともなく聞こえてくる被災地の現状に、「なにかしなきゃ」と急くような気持ちになってはじめたプロジェクトだったけれど、次第にチャリティという意識が薄れ、単純に同人誌制作を楽しんでいる自分がいた。チャリティという名目ではあったが、テーマは各自自由、それぞれがそれぞれに書きたいものを——と最初に決めたのが功を奏したのか、集まってくる原稿のどれもすばらしく面白いこと！「いまだかつてこんな面白いアンソロジーが存在しただろうか」と自画自賛してしまうほど、世界中に誇りたい一冊ができあがった。

この春からは「文芸あねもねR」というプロジェクトが新たにはじまった。Rは「朗読」「Reading」のRで、声優の井上喜久子さんと田中敦子さんが発起人となり、『文芸あねもね』収録作品をオーディオブックとして販売し、その収益を復興支援のための寄付金にするというもの。第一弾としてすで

に彩瀬まる『二十三センチの祝福』（朗読：小山力也さん）、拙作『少女病 近親者 ユキ』（朗読：小野大輔さん）が配信されているので興味のある方はぜひダウンロードしてみてください。

先日、東京で行われたトークショーで、「みんなが心から楽しんで、それがチャリティになるなんて最高じゃないか」と出演者の方がお話されていたのがとても印象的だった。本当にそのとおりだなあと。声優もエンターテインメントの力を信じているのだなあ、と。

震災直後は「私の仕事なんてなんの役にも立たない」と無力感に打ちひしがれていたけれど、エンターテインメントにしかできないことがあるとこの二年で学んだ気がしている。物語がなくなると人は死なない。だけど、人にはどうしようもなく物語を必要とする瞬間がある。世界中のすべての人を幸せにする物語なんてない。けれど、世界にたった一人でも笑ってくれる人がいるのなら、その人のために私は物語を書き続けたい。

食玩のようにお菓子かおもちゃかどっちが目的なんだかわからない、そんなチャリティの在り方が自分の身の丈には合っている気がするし、好ましくも思う。

ピックアップ

祈りの音楽—東日本大震災から2年

3月16日、合唱団ノース・エコーのコンサートを聴きにいった。“音楽による祈り”がテーマになっていて、「となりのトトロ」の「さんぽ」など、振り付けの付いた楽しいジブリ作品4曲をはさんで、現代の作曲家サンドストレムの宗教曲2曲と、あまり取り上げられないことのないブルックナーのミサ曲第2番が演奏された。

現代音楽の新鮮な響きに敬虔な雰囲気が溶け合ったサンドストレム。愛知室内オーケストラの柔らかな管楽器の音色に包まれながら温かく真摯な感情が紡がれたブルックナー。おだやかな祈りの歌声に浸っていると、ちょうど2年前、東北の未曾有の惨状に皆が心を痛めていたあの頃の記憶がよみがえってくる。

ミサ曲の余韻が残る中、最後にアンコール。指揮の長谷順二氏が東日本大震災について、「私たちにとって必要なのはあの震災を忘れないことです」と語り、佐藤賢太郎作曲の「つながり」が紹介され歌われた。この合唱曲は、震災から5ヶ月後の8月に福島県で開催された第35回高等学校総合文化祭の開会式に際し、福島県の



合唱団ノース・エコーの演奏会 ブルックナーのミサ曲第2番
(3月16日 愛知県芸術劇場コンサートホール)



東日本大震災復興チャリティーコンサート 最後に全員で《花は咲く》
(3月31日 熱田文化小劇場)

高校生のアンケートをもとにして創られた音楽劇《福島県からのメッセージ》の中の1曲である。楽譜に記された作曲者自身の言葉によると、福島の高校生たちの、私たちをしっかりと見て感じてください、という思いを合唱曲としてまとめたものだという。震災後、被災地を応援し支えようと数々の歌が書かれているが、この曲も真実にみちた歌詞と優しいメロディーが心に響く良い曲だった。

3月11日には、名古屋二期会が電気文化会館で「第3回東日本大震災チャリティーコンサート」を開催。翌日の12日には、名古屋フィルハーモニー交響楽団の客演コンサートマスターも務める植村太郎氏が、宗次ホールでのプロデュース公演で追悼の気持ちを込めて三重奏を奏でた。また、3月31日には地元演奏家18人と3グループ、マジック1人による「東日本大震災復興チャリティーコンサート」が熱田文化小劇場で催された。被災地のことを忘れない、という音楽家たちのメッセージがいろいろところから発せられている。(小沢優子)

Report

視点

名古屋市芸術創造センター〈創造活動サポート公演〉 「第38回名古屋長唄大会」青少年育成事業について

不況が長引いているが、「芸どころ名古屋」を次世代の市民につなげるためには、小学生・中学生の頃、本物の伝統芸能を鑑賞する、もしくは和楽器に触れてみるという体験がとても有効である。今回の「視点」では名古屋市芸術創造センターの取り組みのうち「第38回名古屋長唄大会」の「青少年育成事業」についてセンターと指導される先生方に伺いとめた。(飯塚恵理人)

名古屋市芸術創造センターの事業

芸術創造センターでは、毎年、様々な文化事業に取り組んでいる。平成24年度は「企画公演（地元の芸術文化団体と連携して独自の企画性の高い公演を実施する）」、「創造活動サポート公演（地元の芸術文化団体と共催し、公演全体をサポートする）」、「バレエアカデミー&発表公演（地元で活躍するダンサーを講師とし、長期に渡るワークショップを実施し、またその成果の発表公演を行う）」、「アートマネジメント講座（地元で活躍する芸術文化関係者で、長年様々な企画に取り組み、意欲的な舞台創造活動を行っている方を講師に迎えて講演を実施する）」、「資料室企画展（資料室所蔵のチラシや機関誌等を1階ロビーに展示し、地元の芸術文化団体の足跡を紹介する）」などがある。平成24年度の「創造活動サポート公演」は3公演を開催した。これは(1)平成24年7月21・22日のANET創立20周年記念公演「おどりマンダラ・祈り」、(2)平成25年2月17日の第38回名古屋長唄大会、(3)平成25年3月30・31日の劇団うりんこ40周年記念公演「罪と罰」である。このうち「名古屋長唄大会」は前年に続いて2年連続のサポート公



名古屋長唄大会パンフレット



名音副科長唄部

演となったが、これまでなかった青少年育成事業を取り入れている。

青少年が出演するのは、冒頭の「青少年育成事業」の部分。初番の「京鹿子



柁屋六春先生

娘道成寺」を演奏する『名音副科長唄部』は名古屋音楽大学で柁屋六春先生の指導で長唄を稽古しているメンバー。音楽の教職免許を取る人は和楽器の科目を取得する必要があり、名古屋音楽大学では箏・長唄・尺八のうちから選ぶことになっている。柁屋六春先生はこの講義の担当で稽古は大学の教室で週2回の授業。名古屋長唄大会に名音副科長唄部としての参加は24年度が初めて。名古屋音楽大学邦楽定期演奏会には第1回から毎年参加している。今回の長唄大会には副科生と副科卒業生14人で参加した。「京鹿子娘道成寺」を演奏曲に選んだ理由は、はなやかに大勢の学生さんに、それぞれ聴かせどころを担当してもらいたかったからとのこと。『名音副科長唄部』は11月16日の秋栄会(今池ガスホール)へ出演が決まっている。

『あかりの会』は杵屋見佳先生がご自宅で個人指導されている小学生・中学生が中心の3歳から26歳のメンバーで構成。名古屋長唄大会への参加は3回目となり、今回は「岸の柳」を演奏。唄は小学校2年生2人と4年生1人、三味線は指導の杵屋見佳先生、中学校1年生1人と2年生1人の計6人で演奏した。選曲は唄と三味線の二重奏が軽快なリズムの中に構成されており、子どものうちから長唄の粋なリズム感を身に刻んで欲しいという願いから。3月24日の見音代会では「さくら・荒城の月・お月様」を箏・ヴァイオリンと共に、長唄が初体験の子ども達を含め19名で演奏した。また8月18日に開催の青少年長唄まつり&レクチャーコンサートには、8歳の娘さんと共に初回より6回連続で出演する。



杵屋見佳先生



あかりの会

『梶山組』は梶山小学校で六代目杵屋三太郎先生の指導。梶山小学校での長唄は平成14年から始まっている。今回の長唄大会では、唄が梶山小学校の4年生2人、5年生1人の3人。三太郎先生と三太郎先生が個人指導している中学2年生の男の子1人が三味線、三太郎先生について稽古している梶山小学校卒業生の三太萌さんが上調子を勤めた。梶山組は梶山小学校のクリプトメリアン・サタデースクールで土曜日の稽古だが、この4月からアフタースクールで月曜日の午後の稽古となっている。今回「勸進帳」を演奏曲に選んだ理由は、10年以上子どもたちを指導してきて、唄・三味線ともにバランスがよくなっているため大曲への「挑戦」のつもりで選びましたとのこと。三太郎先生の梶山組は4月13日の市民会館での吉弥会の子ども長唄、10月6日の杵三会(今池ガスホール)へ出演が決まっている。

育成事業の演奏、『名音副科長唄部』『あかりの会』『梶山



梶山組

組』三組とも日頃の稽古の成果が十分に出た立派な演奏だった。3グループの子どもたちが明日の「芸どころ名古屋」を担ってくれることを期待し、次世代の名古屋市民に長唄をはじめ伝統芸能が親しまれるよう祈っている。



杵屋三太郎先生



稽古風景 名音副科長唄部



稽古風景 あかりの会



稽古風景 梶山組

この人と...



作家

山下 智恵子さん

「女たち」を追い続けて

「書くことで自分というものを耕してゆこう」と30代で作家として出発した山下智恵子さん。悩み、葛藤しながらも、自分の足で歩いて行こうとする女たちの姿を、さまざまな作品を通して追い続けてこられました。テレビやラジオへの出演、大学講師や自治体での文化振興のお仕事など幅広い分野で活躍されてきた山下さんですが、今回はご著書を引用しながら、書き手としての横顔に迫りたいと思います。
(聞き手:酒井晶代)

転校つづきの子ども時代

父の40すぎからの子で、雨靴が泥でよごれると、父が洗って干してくれる。高校生になっても、襷スカートや布団の下にきちんと畳んで、寝押しをしてくれた。まるで母親がするように、私の身のまわりの世話まですすんでくれた父である。
(『野いばら咲け』)

山下(旧姓:清水)さんは1939年、名古屋市北区の生まれ。兄2人、姉1人の4人兄弟の末っ子で、とりわけお父さまには可愛がられて育ったという。

「生真面目な父親でした。戦争中、父は兄たちと一緒に津で暮らしていたのですが、空襲時には町内の消火活動に懸命で家財は何も持ち出せないまま。私たち娘を連れて近郊の安濃村に縁故疎開していた母親があきれていたことを覚えています。終戦当時、私は国民学校の1年生でした。父親の仕事の関係で小学校は津、名古屋、高山、犬山と転校を繰り返して、名古屋に落ち着いたのは中学時代です」

子ども時代を過ごした場所で一番思い出深いのは飛騨高山。転校間もないころ、校庭のポプラの樹と背後にそびえる乗鞍の山並みに心を慰められたという。女剣劇一座の男役に恋心を抱いたのも、この地での大切な記憶のひとつ。早熟な少女だったのだろう。得意だった作文で夏から秋へと移り変わる風景を書いて、「子ども離れしている」と評されたこともあったそうだ。

「転校続きでしたから、子どもごろに『別れの時に辛い思いをしないよう、あまり友達を好きにならないでおこう』と自制心を働かせていました。一方で男装の麗人に憧れて水の江滝子にファンレターを出したり、『ヴェニス商人』のポーシャに憧れたり、吉屋信子の少女小説も愛読しました。自分が置かれている現実の場所よりも、はるか遠くの場所に心を遊ばせることが好きな子どもだったのでしょ」

激動の時代の大学生として

大学では演劇部に入ったせいで、サルトルやカミュ、ボーヴォワールを読んだ。サルトル・カミュ論争。ボーヴォワールとサルトルとの自由な形の結婚。そんなものに、日本には無いヨーロッパならではの文化を感じ、それについて語ることで自己満足していた。実存主義もよくわからないままに。
(『野いばら咲け』)

明和高校を卒業後、名古屋大学文学部に進学した山下さんは、新村猛氏のもとでフランス文学を学ぶかわら演劇部でも活躍する。

「演劇部には脚本志望で入部しましたが、女子学生が少ない時代でしたから何でもやりました。卒論はサン＝テグジュペリです。教養部時代に『星の王子さま』の原書を読み、詩的な文章に惹かれたのがきっかけでした。作者のドラマチックな生涯にも魅了されました」

「大学時代の最大の出来事は 1959 年の伊勢湾台風と 60 年安保闘争です。伊勢湾台風の襲来時は3年生。遊走腎の手術直後でしたが、大須小学校に避難していた子どもたちの世話など救援活動に参加しました。翌年になると安保闘争が激化し、毎日のようにデモがありました。東京大学の学生だった樺美智子さんが亡くなった時には名古屋でも抗議集会が開かれ、その場で彼女に捧げる自作の詩を読み上げました」

編集者志望から高校教諭へ

私は大学を卒業すると、ある県立高校の国語科の教員になった。当時デモ・シカ教師という言葉が流行したが、まさに私なぞ、そのシカ教師のうちであった。

四年制大学卒の女子には、一般会社の門戸は狭く、私は教師にシカなれなかった。

そして、無謀にも新任教師のうちにすぐさま結婚。そして出産した。まったく人生設計などまるで眼中にない、若さだけを頼りにした暮らしぶりであった。

(「現代共働き考」「女の地平線」)



高校教諭のころ、遠足にて (中央が山下さん)

両親の反対を押しきり、編集者を目指して山下さんは東京で就職活動をする。女子学生というだけで就職はおろか、入社試験のチャンスさえ得にくかった時代の果敢な挑戦。幸いある出版社から内定を得るが、一通の電報で内定取消しを告げられる。はっきりした原因は今なお分からない。1961 年、山下さんは失意のなかで公立高校の教諭として社会人の一歩を踏み出す。のちに当時を振り返って「未熟であること、若いということは、時に救いでもある」と書いておられるが、このころの体験を伺っていると、華奢な身体のことからエネルギーが湧いてきたのだろうと驚いてしまう。

「社会人 1 年目の6月に父親を亡くし、同じ月に高校時代の同級生と結婚、12 月に長女を出産しました。夫は東京の大学に通学していましたから当初は別居結婚です。出産後は母に子どもの世話をしてもらって職場に復帰しました。教科書を使わず、小林多喜二の作品を読ませるなど、問題教師だったかも知れませんね。61 年から 73 年のあいだに4

人の女の子の母親になりました。次女を出産したあと少し体調を崩し、母からも『2 人も預かれない』と言われて 67 年の秋に高校を退職、28 歳のときです」

「退職後、打ち込むものが欲しいと泣いてばかりいた折、中部短歌会に所属していた姑が短歌を勧めてくれました。ほどなく詩作の勉強も始めました。小谷剛氏主宰の同人誌『作家』に入会したのは 29 歳のときですが、この時に提出した作品は、小説ではなく詩です」

同人誌『作家』への参加

自分の生きる場所を持たず、漂う女。出口を模索する女。飢餓感にさいなまれる女。暗闇にむかって飛んでしまう女。うづくまる女。私の中の女たち。
(「あとがき」「砂色の小さい蛇」)

「4 人の子どもの母親として育児の楽しさを味わう半面、自分の時間を奪われることの辛さや葛藤もあり、常に引き裂かれる思いを抱いていました。『自分の内面をわかりやすく書きたい』と考えるうちに、詩歌から小説へと取り組むジャンルが変化していきました」と語る山下さん。『作家』には 1986 年まで 18 年間所属されたが、初の単行本『砂色の小さい蛇』(BOC 出版部、1978 年)で前期の代表作を読むことができる。『文學界』に転載された「掌の息」、第 15 回作家賞受賞作の「犬」をはじめ、8 編の収録作には「つまずき、とまどい、たちすくんで」いる女たちが登場する。意識や時間のたゆたいをたどる、透徹した文体が印象的だ。収録作の最後を飾る「埋める」は、1976 年に女流新人賞(中央公論社主催)を受賞した作品。帰らぬ男を待つ女を描いた短編小説で、選考委員の三浦哲郎氏から「鍛えぬかれた文章」が高く評価されている。



同人誌『作家』

「受賞は自分にとって転機となった出来事でした。子育てをしながら書く書き手は当時珍しかったらしく、新聞やテレビの取材が続きました。これが縁となり、テレビ局からレポーターの仕事の依頼が来るなど行動範囲がぐんと広がったのです。子どもを知人に預けて、泊りがけの取材にも出かけるようになりました。『自分が必要とする原稿用紙などは、自分で得たお金で買いたい』との思いで、夢中で仕事をしました。この転機が文学伝習所への参加にもつながったのだと思います」



1976年、女流新人賞の授賞式(東京會館)

文学伝習所へ！

いったい、あの6日間は、私にとって何だったのだろう。あれから、ずいぶんと時間が経過したような気がする。かと思うと、ふいに熱っぽい言葉とともに、黒板に押しつけられたチョークのポキッと折れる音や、教室の後ろのほうで咳ばらいまでが、はっきりと甦ったりする。

(『文学伝習所の六日間』『女の地平線』)



文学伝習所にて、井上光晴氏と

1978年3月には井上光晴氏が開校した文学伝習所に参加するため佐世保へ。大学時代に友人の勧めで井上氏作品を知って以来、文章に魅了され、社会へのまなざしに圧倒されてきた。新聞で偶然に伝習所の存在を知ると、行きたいという思いを抑えることができなかったという。この時に始まった井上氏との交流、毒気や弱さをも含めて人をひきつけてやまない人物像、さらに没後に公開された映画『全身小説家』への違和感については、2006年に上梓された『野いばら咲けー井上光晴文学伝習所と私』(風媒社)に詳しい。

女性運動のなかで見えてきたもの

光子を死にいらしめたものの中に、女であるが故の抑圧・差別があったのではないかと。人間解放をめざす運動の中でさえも、女は不当に扱われて来たのか。そして、それは遠い過去のことではなく、今もなお残存しているのではないかと。(中略)

熊沢光子が親きょうだいとの肉親の絆を断ち、最高は死刑である治安維持法に触れるのを承知のうえで運動にとびこみ、その中で挫折した事実の重さと、現代に生きる私のささやかな挫折は質もちがうし比較しようもない。しかし、私自身、女であるがゆえに感じてきたさまざまな息苦しさ、生き難い思いを持っているからこそ、運動のさなかに無残な死をとげた彼女を、忘れることができないのだった。

(『幻の塔』)

山下さんの書き手としての歩みのなかでもうひとつ見逃してはならないのが、女性運動とのつながりであろう。活動の拠点となったのは女性グループ「あごら」。雑誌発行や勉強会、専門



「あごら」のファッションショーに参加
(1975年ごろ 右端が山下さん)

職集団 BOC(バンク・オブ・クリエイティビティ=創造力の銀行)の運営などを全国的な規模で展開してきた、日本の女性運動の草分け的な団体のひとつである。

「高校時代の同級生・高橋ますみさんとの再会から『あごら』に出会いました。新聞の投書欄に載った私のエッセイ、日々の暮らしの悩みを綴った文章を高橋さんが偶然読み、電話帳で連絡先をつきとめてくれたのです。育児をしながら社会との接点を模索していた高橋さんと意気投合、女性の連帯を大事にする『あごら』の精神に共鳴しました。『砂色の小さい蛇』をBOCの出版部門から刊行した際には、全国の仲間たちが宣伝活動に奔走してくれました」

1980年にはコペンハーゲンで開催された「国連婦人の10年世界会議」に『あごら』のメンバーとして参加、さらに85年にはBOC出版部から『幻の塔ーハウスキーパー熊沢光子の場合』を出版するなど、山下さんの行動や執筆の幅

はさらに広がっていく。1935年に24歳で獄中死した熊沢光子は、山下さんにとって高校の先輩にもあたる女性。各地に足を運んで関係者に取材し、進歩的とされる運動の中に潜在した女性差別とその構造を告発したこの作品は、鶴見俊輔氏らによって高く評価された。



1980年、コペンハーゲン世界会議にて
(右端が山下さん)



1981年7月、寂庵にて(中央が山下さん)
このころ「小説熊沢光子」(のちの『幻の塔』)を書き継いでいた

70代だって捨てたものじゃない

古稀を過ぎてから、私より年上の男たち5人と語り合っ、同人誌を創刊した。

「私が71歳。一番若い」と、はしゃいで言ってみるが、「肉体的にも精神的にも、兄貴分たちのほうが私より動く、若々しい」と、内心、舌をまいた。

(「70代だって捨てたものじゃない」『あざら』331号、2011年11月)

引用中の同人誌は、2010年にスタートした『遊民』を指す。「平均年齢76歳の同人誌」として、創刊時には新聞の文化欄などでも話題になった。「遊民」は、亀山巖氏が好きだった言葉だという。

「この同人誌で久しぶりに小説を書きました。私はやっぱり小説が好きなんです。家族で私の作品を読むのは長女と次女です。夫は絵画が趣味で、幸いなことに妻の作品に関心を持ちません。私の場合、もし夫に読まれたら萎縮してしまって、書きたいことが書けなくなりそうです。小説を書くことは一人になること、自分が一人になれる何物にも代えがたい時間です」



2009年11月、カリフォルニア州・ヨセミテ国立公園にて

原稿はもっぱら手書きとのことで、取材時にもテーブルの上書きかけの原稿用紙が置いてあった。自宅より喫茶店や病院の待合室の方が集中できるときもあるといい、常に原稿用紙と筆記用具を持ち歩いていらっやるといふ。

「『遊民』の第3号から小説『サダと二人の女』の連載を始めました。二人の女は70代と50代の現代の女性。サダはあの阿部定です。阿部定は『国家に一度も頭を下げなかった人』と言われていふ。ふしだらな女やスキャンダラスな女ではない、定の内面に迫りたい。世代の異なる三人の女性の生き方を追いたいと思っています」

いま、山下さんの眼に映っているのはこの三人の女たち。私たちはこれからも、作品を通してたくさんの女に出会うことができる。



同人誌『遊民』



著書の表紙画は、
娘さんたちの手によるもの

(主要著作一覧(単行本のみ))

『砂色の小さい蛇』

(BOC出版部、1978年)

『幻の塔—ハウスキーパー—熊沢光子の場合』

(BOC出版部、1985年)

『女の地平線』

(風媒社、1985年)

『野いばら咲け—井上光晴文学伝習所と私』

(風媒社、2006年)

名古屋市文化振興事業団2014年企画公演 事業団設立30周年記念事業 Theatrical Music Gala Concert ～時間旅行～(仮題) オーディションのお知らせ

公益財団法人名古屋市文化振興事業団では、毎年、地元で活躍する音楽・演劇・舞踊をはじめとする舞台人の総力を結集し、新しい可能性を追求する企画公演を開催してまいりました。

第30作目を迎える今回は、事業団設立30周年を記念し、オペラ、オペレッタ、ミュージカルと続く総合舞台芸術の歴史を数々の名作から選び抜かれたアリア、ミュージカルナンバーとともに迎えるガラ・コンサートをお贈りします。出演者は、第30作目の公演を記念し、これまでの事業団企画公演ゆかりの実演家を中心に一部決定しておりますが、下記のように男女ソリスト・アンサンブル及び、男女ダンサーを広く募集いたします。是非ご応募ください。

【公演日時】

2014年2月21日(金)～23日(日)〈5回公演〉

【応募資格】

次の①～④の条件を満たす方に限ります。

- ①原則として、名古屋市内または近郊の地域を中心に芸術文化活動を行っている方。
- ②平成25年4月1日現在で満15歳以上の心身ともに健康な方。
- ③指定する日時・会場で、稽古及び公演に参加できる方。
- ④《稽古概要》11月中旬から本番前日まで
- ④ チケット販売に協力できる方。

【実施内容】

次のように①、②のうち、いずれかの種目を選択し、実施していただきます。当日は動きやすい服装と靴をご用意ください。

- ①〔歌唱〕(指定課題)
- ②〔ダンス〕(当日指定)

【日時・会場】

次のいずれかの日程で決定し、お知らせいたします。

《日程》平成25年7月6日(土)または7日(日)

《会場》名古屋市青少年文化センター(名古屋市中区栄三丁目18番1号)



2013年企画公演「こもり」

【申込方法】

所定の申込書に必要事項を記入のうえ、下記期限までにご提出ください。

《郵送》平成25年6月20日(木)〈消印有効〉

《持参》平成25年6月21日(金) 17:00

所定の申込書、指定課題については直接ご来訪いただくか、①郵便番号・住所 ②氏名 ③年齢 ④性別 ⑤電話番号を明記のうえ、郵便またはFAXにて6月14日(金)〈消印有効〉 までに下記申し込み先へご請求いただければ郵送します。なお、提出された書類は返却いたしませんのでご了承ください。

【その他】

- ①オーディションの結果、該当者がいない場合は、別途出演者を指名する場合があります。
- ②出演者には公演終了後、少額ですが出演料をお支払いします。

〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号

ナディアパーク 名古屋市青少年文化センター内8階

名古屋市文化振興事業団 事業案内「事業団30周年記念事業」係tel.052-249-9387

fax.052-249-9386 (受付時間:平日 9:00～17:00)

TVS

美と輝きの瞬間

人々の信頼を広げ、出逢いをつくり、感動を映像に残します



株式会社 東海ビデオシステム

〒460-0013 名古屋市中区上筒津2丁目14番15号
TEL.052-322-6541 FAX.052-322-6638
http://www.tvso.co.jp



■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守

株式会社エーアンドブイ
〒464-0846
名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL 052 (761) 5400
FAX 052 (761) 0909

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。



◎年間6,300円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営